

ワーズワスのツチボタルと環境詩学

佐々木 郁 子

▶キーワード

イギリス・ロマン派文学
ウィリアム・ワーズワス
環境批評
虫

▼要 旨

本論は、環境批評を援用したイギリス・ロマン派研究で取りあげられることの少ない（昆）虫の表象に焦点を当て、ウィリアム・ワーズワスを中心に同時代の作家たちも参照しながら、虫の捉え方や描き方について検討したものである。

ワーズワスの詩で頻出度が高く、かつ主題にもなっている虫は、チョウ、ツチボタル、ハエで、特にチョウとツチボタルは、詩人やその家族、友人たちのお気に入りであったことが知られている。幼少期の象徴として描かれることの多いチョウに対し、ツチボタルの描写には、その光を神聖なものとする宗教詩や、メスがオスを光でひきつける生態に由来する恋愛詩の慣習的レトリックの影響が見られる。一方で、『序曲』をはじめとするいくつかの作品では、ツチボタルの存在にしっかりと眼差しを向け、光というよりはその静けさを際立たせるといふ、他の作家たちには見られない独自の描き方がなされている。

環境批評家のジョナサン・ベイトは、ワーズワスが自然との交感体験をうたう際、自然を静寂を表す言葉で形容したり、沈黙した存在として描いたりしている点に注目して、それを、自然の存在の本質に迫り、人間中心主義的発想を介さずに表そうとする環境詩学の一例として読んでいる。本論では、ツチボタルの描写もまた環境詩学的であることを示し、動植物と比べて敬遠されがちな虫の表象に対してもエコロジカルな読みが可能であることを論証した。

1. はじめに

イギリス・ロマン派研究に「環境批評」が導入されてから20年以上が経ち、作品に描かれた、

あるいはそれを取り巻く自然環境や動植物を対象とした研究が増えてきているが、(昆)虫を扱うものは依然として少ない⁽¹⁾。虫は、人間が屋内外問わず遭遇する大変身近な生き物なので、当然多くの作品に登場している。研究する際に問題となるのは、それに言及はしていても、それを主題とした作品があまり多くはないという事実だろう。ロマン派を代表する自然詩人、ウィリアム・ワーズワス(1770-1850)を例にとっても、チョウにまつわる有名な詩が2篇あるだけで、それ以外に作品の主題になっている虫は、ツチボタルとハエくらいである。このように、そもそもロマン派による虫を扱った作品が少ないという、研究材料の乏しさゆえに、研究者からは敬遠されがちな虫であるが、環境批評を援用したロマン派研究では重要な研究対象になる可能性を秘めている。なぜなら、先行研究で頻繁に論じられてきた動植物と、虫との間には、存在論的差異とも呼べるものがあるからだ。例えば、動物は生物学上人間と近しく、植物はその美しさや有用性のために作家の共感の対象となりやすいが、虫の場合は必ずしもそうではない。独特な外見から嫌忌の対象となるものもいるし、人間との差異が大きく、異質性が強いために、他なる存在として認識されることも多い。このように、共感を呼びにくい存在は、積極的には内面化もされにくいので、虫の描写からは動植物のそれらからよりも明確に作家の自然観を読み取ることができるかもしれない。こうした可能性を考慮すると、虫は、動植物とは別に分析される必要があり、環境批評家が提示する「新たな」読みの対象として位置付けられるべきものだといえる。

本論では、環境批評を援用したロマン派研究で取りあげられることの少ない虫の表象に焦点を当てて、ワーズワスを中心にロマン派の虫の捉え方や描き方に迫ってみたい。ワーズワスの作品のなかで頻出度が高く、かつ詩の題材にも選ばれている虫は、上でもふれたように、チョウ、ツチボタル、ハエくらいである。特にチョウとツチボタルは、伝記的研究からも、ワーズワスや彼の家族、友人たちのお気に入りであったことが知られている⁽²⁾。例えば、チョウの場合、1802年の3月と4月にそれぞれ執筆された「チョウに」(“To a Butterfly,” 1807)という2篇の詩があるが、前者でチョウは「幼少期の歴史家」(4)と呼ばれているように、基本的に幼少期を思い出させてくれる存在、幼少期の象徴として描かれている⁽³⁾。一方、ツチボタルの場合は、その光を神聖なものとして描く宗教詩や、メスがオスを光でひきつける生態に由来する恋愛詩は、ロマン主義の時代以前から存在していて、ワーズワスの作品にもその影響が見受けられる。しかし、彼の自伝的長詩『序曲』(*The Prelude*, 1805)では、単に比喩として登場するだけの他の虫たちとは異なり、ツチボタルは、存在そのものにしっかりと眼差しが向けられていて、また光というよりは静けさを際立たせるといった独自の捉え方や描き方がなされている。興味深いことに、このような特徴は、『序曲』以外のいくつかの作品にも見てとれる。以上をふまえ、本論では、先行研究で取りあげられることの少ない虫のなかでも、ワーズワスのツチボタルの描写に焦点を当てて、他のロマン派による描写と比較検討をし、ワーズワスによる描写の独自性を浮き彫りにする。その上で、環境批評の観点から読み直した場合、それがどのような意味を持ちうるのかを考察する。

II. ロマン主義の時代におけるツチボタル

ワーズワスのツチボタルの描写を見ていく前に、そもそもツチボタルとはどういう昆虫で、

18世紀後半～19世紀前半のロマン主義の時代においてどのように理解されていたのかを確認しておく必要があるだろう。ワーズワスの作品に登場する「ツチボタル」(glow-worm)とは、日本で一般的に見られるゲンジボタルなどの「ホタル」(firefly)とは異なる種である。OEDによると、「鞘翅目の昆虫で、メスは腹部の先端から明るい緑色の光を発する。メスには翅はない。オスには翅があるが発光しない。」と簡潔に説明されている。ただ、その例文のなかには、博物学者ギルバート・ホワイト (1720-93) の『セルボーンの博物誌』(*The Natural History and Antiquities of Selborne*, 1853) からの一節があり、ワーズワスはその初版を読んでいたことが知られているので、後でホワイトによるツチボタルの描写を具体的に見ていくことにする⁽⁴⁾。

ロマン主義の時代におけるツチボタルの理解度をはかる目安として、ワーズワスが実際に読んでいたとされる『ブリタニカ大百科事典』(*Encyclopaedia Britannica*, 1797) 第3版の定義を参照しておきたい⁽⁵⁾。「ランピリス」(lampyris)という項目内に、ツチボタルの解説が含まれている。よく見かけられる時期や場所の説明に始まり、メスがオスをひきつけるために発光すること、その光が体のどの部位からどのようにして放たれ、またそれが何の物質に由来するかまでが事細かに紹介されている。発光については、「神の摂理の見事な例」(519)とも表現されていることから、当時の人々がツチボタルの光に宗教的な意味合いを見出していたこともうかがえる。ワーズワスがこの百科事典を読んでいたこと、またツチボタルにまつわる作品や印象的な描写を数多く残していることから、おおそ上記のような知識を持っていたと考えていいのではないか。

これら OED や百科事典のツチボタルの定義から、発光するのは翅のないメスであるため、作品を読む際には、例えば日本のホタルのように、飛びながら光を放つ様を期待してはならない。ワーズワスの作品でよく登場するチョウやハエといった昆虫は、空中を飛びまわる動的な存在であり、詩人の目線は高くなる。ツチボタルの場合、飛べないメス(の光)が描写されるため、作品のなかでは静的な存在であり、詩人の目線は地面に近いところまで下がる。ツチボタルの描写を読む際は、このような他の昆虫との違いを念頭に置いておくべきだろう。また百科事典で言及されていたように、発光が求愛行動とみなされることや宗教的な意味合いが読み取られていたことは、この時代のツチボタルにまつわる作品に影響を与えている。ロマン派の作品でも、その多くが恋愛詩か宗教詩であり、あるいはそういったイメージを付与されている描写がほとんどで、ツチボタルがそのままに描かれていることは非常に少ない。以下では、ロマン主義の時代におけるテキストのなかで、ツチボタルが具体的にどのように描かれているのかを見ていくことにしたい。

ロマン主義の時代は、ロンドン昆虫学会が1833年に創立され、その一助を担い、イギリスにおける昆虫学の父とも呼ばれるウィリアム・カービー (1759-1850) がウィリアム・スペンス (1783-1860) と共に『昆虫学入門』(*Introduction to Entomology*, 1815-26) を世に送り、まさに昆虫学が他のいくつかの学問と同様に科学の一分野として確立されていた時期にあたる。ワーズワスがカービーらの著作を読んでいたという確証はなく、彼の昆虫の描写も特別に科学的知識の深さをにおわせるものでもないので、本論では当時の昆虫学に関する文献にはふれなくていい。ただし、そうした専門書でなくとも、ワーズワスが実際に読んでいたことが知られていて、彼の自然観に影響を与えたと考えられている博物学者たちの著作で、ツチボタルがどのように描かれているのかは確認しておきたい。以下では、先にふれたホワイトとエラズマ

ス・ダーウィン（1731-1802）の著作におけるツチボタルへの言及箇所を見ていくことにする。

まずは、ホワイトの『セルボーンの博物誌』からの一節を取りあげるが、これは先のOEDの例文として載っていたものではなく、ワーズワスが1789～90年頃に読んだとされる1789年初版でツチボタルが言及されている箇所である。ホワイトは、ウェールズの博物学者トマス・ペナント（1726-98）宛ての手紙、「博物学者の夏の夕べの散歩」のなかで、夏の夕暮れ時によく見かける昆虫、鳥、動物を挙げていき、最後に夜の訪れとともに光り始めるツチボタルにふれて、手紙を締めくくっている。

冷たい夜露が降り始める：一家へ帰る時刻だ；
見よ、ツチボタルが艶めかしい炎をともしている！
このように、夜のとばりが空を半分覆い隠す前に、
待ち遠しい乙女は灯火を高くかかげたのだ：
その合図を目指し、愛の流れ星に導かれて、
レアンドロスはヘロの寢床へと急いだのだった。(70)

この箇所には注がついており、メスのツチボタルの光が「オスへの合図」になっていることや、それが「より目立つように、メスはしばしば草の茎を這い上がる」と書かれている（70）。これらのツチボタルの描写から、ホワイトはメスがオスをひきつけるために発光することを知っていて、それをギリシャ神話、すなわち闇夜に恋人レアンドロスを呼びよせる合図として明かりをかかげたヘロ（アフロディテの女神官）の物語に喩えていることが読み取れる。ツチボタルはその生態から、夜の訪れを知らせる存在であり、また恋愛の象徴的存在として描かれているのである。

ホワイトと同じくワーズワスに影響を与えた博物学者ダーウィンによる著作のなかで、ツチボタルへの言及があり、かつワーズワスが読んでいたことが知られているのは、『植物の園』（*The Botanic Garden*, 1791）のみである⁽⁶⁾。以下がその該当箇所である。

苔むした長椅子の上にいる、その光を発する虫を暖め、
冷たい露から、愛で照らされた体を守るのだ、
葉から葉へと乙女の光を導くのだ、
大地の星、夜のダイヤモンドの光を。(193-96)

「光を発する虫」の光を「愛」によるものとし、また「乙女の光」と表現していることから明らかなように、ダーウィンもホワイトと同様、メスが求愛行動として発光することに着目し、ツチボタルを恋愛の象徴として描いている。ただし、この「光を発する虫」には、かなり詳細な注がついていて、翅のないメスがオスをひきつけるために発光することや、発光のメカニズム（発光物質がリン酸であることや、呼吸が発光の原因であること）について解説されている。さらに、外国のホテルに関するエピソード（夜間の明かりとして使われることなど）に加え、海に生息している発光性の昆虫や、海中の腐敗物の発光の可能性についても言及されている。作品内での描写は少ないながらも、この注からは、ツチボタルが博物学者にとってかなり興味

をそそられる昆虫であったことがうかがえる。

ここまで、ロマン主義の時代における百科事典のツチボタルの定義、ならびにワーズワスに直接影響を与えた博物学者たちによるツチボタルの描写と解説を見てきた。百科事典に記載されていた生態の通りに、夜の訪れを知らせる、まさに地上における星のような存在として、また求愛行動としての発光から、恋愛の象徴的存在として、好意的に描写されていることが見てとれた。次に、ワーズワスやその他ロマン派詩人の作品のなかで、ツチボタルがどのように描かれているのかを見ていくことにする。

III. ワーズワスとツチボタル

ワーズワスがツチボタルに言及している詩作品は、出版年順に『夕べの散策』(*An Evening Walk*, 1793)、『序曲』(1805)、「あらゆる美しいもののなかに私の恋人はいた」(“Among all lovely things my Love had been,” 1807)、『御者のベンジャミン』(*Benjamin the Waggoner*, 1819)、「頌歌 カークストーン峠」(“Ode. The Pass of Kirkstone,” 1820)、「巡礼者の夢、あるいは星とツチボタル」(“The Pilgrim’s Dream, or, The Star and the Glow-worm,” 1820)、「ソネットを軽蔑するな」(“Scorn not the Sonnet,” 1827)、「岩に生えたサクラソウ」(“The Primrose of the Rock,” 1835)、そして「別れの詩」(“Farewell Lines,” 1842)までおよそ9篇ある。そのなかで主人公とはいえないまでも、ツチボタルが重要な役を担っているのは、「あらゆる美しいもののなかに」と「巡礼者の夢」である。ちなみに大きくジャンル分けをすると、前者は恋愛詩、後者は宗教詩となるので、ジャンルだけで判断するならば、ワーズワスも上で見てきたようなツチボタルの慣習的イメージを踏襲しているといえるかもしれない。ワーズワスの場合、齢を重ねるにつれて宗教的な色合いの濃い作品が増えていくけれども、ツチボタルが登場する作品では、「巡礼者の夢」と「岩に生えたサクラソウ」にそうした特徴が見られる。それ以外の作品に目を向けると、『序曲』や『御者』のツチボタルの描写が、恋愛詩と宗教詩のいずれの特徴も持たない点で興味深い。以下では、宗教詩のツチボタル、恋愛詩のツチボタル、最後にその他ワーズワス独自色の強いツチボタルの順に、他のロマン派のツチボタルも参照しながら検討していくことにしたい。

1818年執筆の「巡礼者の夢」は、そのタイトルが示唆するように宗教寓意詩であり、おそらくワーズワス自身が投影されている巡礼者の夢のなかで、星とツチボタルが対話をするという一風変わった内容の作品である。ある晩、宿を断られた巡礼者が悲嘆にくれつつ野宿をすることになる。頭上には星が瞬き、足元には一匹のツチボタルがいる。「つつましかかな」(25、62) ツチボタルにどこか親近感を覚えつつ、巡礼者は眠りににつき、夢を見る⁽⁷⁾。その不思議な夢のなかで、星がツチボタルに対し、おこがましくも光で張り合おうとしていると非難するのだが、ツチボタルは自分の光は星のそれにまったく劣っていないと主張し、神から受けている恩寵を見せしめて見事に星をやりこめる。夢から醒れやかに目覚めた巡礼者は、その場を生涯大切にしたいというストーリーである。

この作品の興味深いところは、宗教寓意詩の形式をとりながらも、実際にはキリスト教信仰ではなく、ワーズワスおなじみの汎神論的自然観がうたわれているという事実である。ツチボタルの光を「地上で生まれた星」(20)として星の光に喩えるのは慣習的だが、この作品では両

者を対立させて、意外にも「つつましやかな」ツチボタルが勝利を収めるという結果になる。傷心の巡礼者が、ツチボタルの存在のつつましさに共感しながらも、その存在価値は自然界では星と同等でなければならないことに気づき、その気づきによって不当な仕打ちに遭った自らが慰められるという、ワーズワス作品にしばしば印象的に描かれる自然との交感体験を通した癒しがテーマになっているのである。この作品は寓意詩の形式をとっているため、ツチボタルは声を持っており、その違和感ゆえにリアルな虫を扱った作品とはいえないという意見もあるだろう。しかし、フェニックスノートによると、この作品は実際にツチボタルが多く生息していたライダルからグラスミアの道中にワーズワスが思いついたもので(12)、作品のツチボタルはまったくの虚構というわけではなく、あくまでもリアルな「地上にいるツチボタル」(「巡礼者の夢」64)に基づいているのである。

作品としては後年執筆のもので宗教色がより濃いものの、「岩に生えたサクラソウ」(1829-31年頃執筆)のツチボタルもまた、詩人に癒しをもたらしきっかけとして登場している。この詩は、ツチボタルが星のように集まる岩場にサクラソウが生えている、ワーズワス兄妹のお気に入りの場所についてうたったものである。ちなみに、1802年に妹ドロシーはこの場所について日記に「ツチボタルの岩」と書き残しており(*Last Poems* 168)、ワーズワスも1831年にフェニックスノートでそう呼んでいたことを認めている(16)。つまり、この作品のツチボタルもやはり、彼らが実際に目にした虫に基づいているのである。ワーズワスは作品のなかで、毎年花を咲かせては枯れていくという不変のサイクルを繰り返すサクラソウの生に、人間の生を重ね合わせて内省することで、魂を清らかにすることができると説いている。ツチボタルは第1連で、岩の「様々な高さで、星たちのように／ツチボタルたちが灯火をかかげている」(3-4)と言及されているのみだが、その箇所は初期の草稿から変更されることなく、あえて残されているところに、この作品にとって欠かせない存在であったことがうかがえる⁽⁸⁾。第2連以降では、自らと自然とを結びつけて癒しを得るという内省が展開されることから、その内省への案内役としての役目をツチボタルが担っていると考えられることもできるだろう。ちなみに1829年執筆の草稿には、こうした内省の心を持たなければ、人間は「枯れゆく花より／あわれで／虫よりもみじめな存在だ」(31-33)という表現があり、1835年出版のものよりも直接的に詩人の謙虚な人間観がうたわれている。

以上、「巡礼者の夢」と「岩に生えたサクラソウ」に見てきたように、ワーズワスの宗教詩のなかのツチボタルは、キリスト教信仰の象徴というよりは、詩人が実際に出会った虫に基づいた、自然界の一存在として描かれているといえる。また、自然界においてはあらゆる存在が同等の価値を持っており、誕生から死へと向かうプロセスを繰り返す同様の生を営んでいること、そして人間もやはりその一例であることを気づかせてくれる、そうした内省へと導いてくれる、自然詩人にとって非常に重要な存在として登場しているのである。

ワーズワスのツチボタルにまつわる詩でおそらく最もよく知られているのが、「あらゆる美しいもののなかに」であろう。これは、妹との間に実際に起こった出来事に基づいて創作されたもので(*Poems, in Two Volumes* 407)、ツチボタルを一度も目にしたことがない恋人(エマまたはルーシー)の家の果樹園に、語り手が道すがら見つけたツチボタルをこっそり持っていく、彼女に見せてあげるというストーリーの素朴な恋愛詩である。前にふれた博物学者たち、ホワイとダーウィンによるツチボタルの描写は、メスが求愛のために発光するという生態に

由来する、恋愛の象徴としての色合いが濃く、またホワイトによるギリシャ神話への言及も、「メスの発する光—ヘロがレアンドロスのためにかけける灯火」という連想から来ていた。ワーズワスの詩で語り手が「嵐の夜」(5、10)に恋人に会いに行くというところは、そのギリシャ神話を彷彿とさせるが、ツチボタルは女性が男性を呼びよせるために用いる合図ではなく、逆に男性の粋な計らいによって女性は初めて目にすることになるものである⁽⁹⁾。すなわち、ツチボタルはあくまでも自然界の「あらゆる美しいもの」の一つとして登場しているにすぎない。もちろん、この作品が恋愛詩であることは明らかなし、幸いにもギリシャ神話の結末(レアンドロスの溺死)とは異なり、語り手は恋人のもとに無事にたどり着き、喜びのなか二人でツチボタルを見つめるところで終わっているの、ツチボタルが二人を結びつける愛の象徴としての側面を持っていることは否めないのだが。

ワーズワスの友人で同じくロマン派を代表する詩人、サミュエル・テイラー・コールリッジ(1772-1834)も、「セアラへのオード、ブリストルからの手紙に答えて、ブリッジウォーターそばの、シャートン・バーズにて詠んだ詩」(“Ode to Sara, Written at Shurton Bars, near Bridgewater, in Answer to a Letter from Bristol,” 1797)と「白昼夢」(“A Day Dream,” 1828)の2篇の恋愛詩でツチボタルを登場させている。1795年9月に執筆された「シャートン・バーズにて詠んだ詩」は、当時婚約者であったセアラ・フリッカーにあてて書かれたもので、結婚を周囲から反対されて孤独な日々を過ごしている彼女を旅先から思いやり、励ますという内容の作品である。ツチボタルにふれている一節の「緑色の輝き」(5)という句は、ワーズワスの『夕べの散策』からの引用であるとコールリッジは注で述べている(*The Collected Works* 236)。

私のさまよう眼差しが
天の星の荒野へと向かうことはない；
今や好奇の眼差しで
通り過ぎざまに、ツチボタルが
草の間を「緑色の輝き」とともに動くさまを
光のエメラルドを目にとめることもない。(1-6)

セアラへの思いにふけっているせいで、頭上の星や足元のツチボタルの光にも気が付かないさまを詩人はうたっている。ここでのツチボタルは自然界の美しい存在物の一例として挙げられているにすぎないが、わざわざワーズワスの作品から引用していること、またそれを自ら注記していることから、両詩人にとってツチボタルが特別な虫であったことがうかがえる。

一方の「白昼夢」は、1802年頃にコールリッジがガロー・ヒルにて、のちにワーズワスの妻となるメアリー・ハッチンソンと妹セアラと一緒に過ごしていた夏の日々を思い出し、彼女たち(主にセアラ)への愛をうたっている作品である。

ツチボタルが落っこちては、縁にはい上がりながら
輝き、またその影も輝き、私たちの愛すべき泉にふさわしい星であった。(17-18)

ここでは「シャートン・バーズにて詠んだ詩」とは異なり、ツチボタルに焦点がくっきりと当

てられていて、おそらくハッチンソン姉妹への愛の象徴として描かれていると考えられる。新月のまわりに星が瞬いているにもかかわらず、ツチボタルを自分たちにとっての「ふさわしい星」と呼んでいるところに、その愛のつつましさをツチボタルそのものへの特別な思いも感じられる。

「シャートン・バーズにて詠んだ詩」と「白昼夢」から、コールリッジにとってもツチボタルがワーズワス兄妹にとってそうであったのと同様に好ましい存在であり、その描写にいたる経緯や描写そのものには、ワーズワス兄妹やハッチンソン姉妹との絆も感じ取られるため、ルーシー・ニューリンのように、ワーズワスやその仲間たち（ドロシー、コールリッジ、ハッチンソン姉妹）の間でツチボタルが仲間意識を保つ役割を持っているとし、友愛の象徴として読む批評家もいる。ただしコールリッジの2作品では、ツチボタルが常に星とセットで登場しており、かなり慣習的な描かれ方がされている上に、「シャートン・バーズにて詠んだ詩」では、ツチボタルは詩人の目に留まる対象ではないし、「白昼夢」でも空想のなかで象徴的に言及されているにすぎない。コールリッジのツチボタルをワーズワスらへ捧げる友愛の象徴として読むことは可能であろうし、そうした意味での重要性は認められるのだが、上で見てきたようなワーズワスのツチボタルと比較した場合、詩人の思想に直接関わってくるほどの存在であるとはいえない。

コールリッジの詩で、ツチボタルが登場するものがあと一篇ある。ワーズワスとの共著『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads*, 1798)にも収められている代表作、「ナイチンゲール会話体詩」(“The Nightingale: A Conversation Poem,” 1798)である。ワーズワス兄妹と夜の散歩中にナイチンゲールのさえずりを耳にしたコールリッジは、その鳥が多く生息している森にまつわる思ひ出を語るなかで、ツチボタルにもふれている。

月に照らされた茂みに、
露にぬれた小葉は半分開いているだけだが、
小枝にとまっている鳥たちを偶然にも見るかもしれない、
彼らの明るい、明るい目を、明るくて丸い、
きらきら輝いている目を。葉陰では、たくさんのツチボタルが
愛の灯火をともしている。(64-69)

「シャートン・バーズにて詠んだ詩」と「白昼夢」は恋愛詩であったのに対して、この作品はナイチンゲールのさえずりの本質を捉えようとしている点で自然詩に分類されるものだが、ここでもツチボタルの光を「愛の灯火」と呼んでいることから、コールリッジは基本的にツチボタルを恋愛の象徴として用いているといえそうである。ただし、この作品で興味深いのは、ツチボタルの光が先の2作品のように星の光とではなく、ナイチンゲールの目の輝きとセットで描かれているところである。ナイチンゲールのさえずりではなく、きらきらとした眼差しを取りあげて、ツチボタルの光へとつなげていくのは比較的珍しい例といえるかもしれない。例えば、ロマン派の先駆的詩人ウィリアム・クーパー(1731-1800)にも同じ題材を扱った作品、「ナイチンゲールとツチボタル」(“The Nightingale and Glow-worm,” 1782)がある。これは、ナイチンゲールにあわや食べられそうになったツチボタルが熱弁をふるって相手を説き伏せ、難を逃

れるという寓話の後に、詩人がキリスト教徒に向けて、これらの生き物たちのように互いに尊重しあい、平和を目指すべきであることを説いた宗教詩で、おそらくワーズワスの「巡礼者の夢」の形式にも影響を与えていると考えられる作品である⁽¹⁰⁾。クーパーの詩におけるツチボタルは、ナイチンゲールが歌を歌い、ツチボタルは光を発することで、夜を美しく活気あるものにするのは、神の御心によるのであり、その意味で自分たちは同等なのだから、どうか自分を食べないでほしいと鳥に懇願している。つまり、両者は「歌」と「光」で対比されているのである。

ツチボタルの光を鳥のさえずりとともに描写しているもう一つの例として、再びロマン派詩人に戻り、パーシー・ビッシュ・シェリー（1792-1822）の「ヒバリに」（“To a Skylark,” 1820）を挙げておきたい。シェリーは、空高く舞い上がり、力強く鳴くヒバ리를、人知を超えた神秘的な存在としてうたいつつ、その鳥をさまざまなものに喩えていく。その比喩の一つに、草花で姿は隠れているが、澄んだ色合いの光を放っている「金色のツチボタル」（46）がある。

まるで金色のツチボタルが
霧の谷で、
ひっそりと振りまく
清澄な色が
草花に隠れて、人知れず輝くよう：（46-50）

以上見てきたように、ツチボタルは鳥とセットで描かれることも多く、それはコールリッジのナイチンゲールの目の輝きがそもそも星の光から連想されたものであると考えられること、またクーパーの詩の末尾に「地を這うものと空を飛ぶもの」（38）とあるように、天と地という両者の対照的な位置関係にも起因していると考えられる。さらに、ツチボタルは視覚に、鳥は主に聴覚に訴えかけるという点でも好対照であるから、ツチボタルの光は星の光だけでなく鳥のさえずりとともに頻繁に描かれているのであろう。

それでは、ツチボタルが鳥とは異なり、聴覚に訴えかけることができないことは、ツチボタルの欠点でしかないのだろうか。詩人にとって、ツチボタルは発光するという点においてのみ詩的な意味を持ちうる存在なのだろうか。このことについて、上で論じてきた詩人たちとは異なる捉え方をしているのがワーズワスである。彼もまた『序曲』と、同時期に執筆された『御者』のなかで、ツチボタルを鳥とともに登場させている。しかし、鳥の声と対比されるのは、ツチボタルの光というよりはむしろ、それが声を発さないこと、その静けさである。

ワーズワスの自伝的長詩『序曲』でツチボタルが登場するのは、実は第7巻の冒頭部分のみである。作品全体を見渡してみると、昆虫への言及は13箇所あり、ハチが5箇所と最も頻出度が高い。ただし、昆虫そのものに直接的にふれているのは、第6巻の身体を刺したり、一日中うるさい羽音をたてたりする「蚊」（643）と、第11巻の春の喜びを分かち合う仲間としての「虫たち」（28）、そして後述するツチボタルのみである。頻出度の高いハチは、にぎやかさの象徴として描かれることが多く、上記の第6、7、11巻の虫たち以外はすべて比喩的に用いられているにすぎない。この事実だけを挙げてみても、ワーズワスにとってツチボタルがいかに特別な虫であったかが分かるだろう。それでは、そのツチボタルが第7巻でどのように描かれてい

るのかを見ていくことにしたい。

『序曲』の執筆が数年間滞っていたころ、ある夕暮れ時に、コマドリの群れが夏の終わりを告げに家のそばにやって来てさえずっているのをワーズワスは耳にする。彼は思わず喜びで胸がいっぱいになり、自分も鳥たちと一緒にうたおうとつぶやく。ツチボタルの登場は、その直後である。

それから、
薄れていく夕暮れの光をたよりに山辺を歩いていくと、
薄暗い木陰や
まだ枯れきっていないシダの覆いかぶさるような葉の下に、
一匹のツチボタルがくっきりと鮮やかに光っているのが見えた。まるで深い森の中から見える隠者のろうそくの光のようだった。ここで静けさが
先ほどの声音に劣らず私の心に強くふれた：
自分で光を発しては、いつまでも消え去らない、この夏の子は、
人影まれな山の上の、この声なき虫は、
戸口でさえずっていた、あの真冬の合唱隊と
同じ使いに遣わされてきたように思われ、
これからまる一年は優しさと愛に満ちているような予感がした。(37-48)

黄昏時の散歩中にワーズワスはふとツチボタルを見つけ、コマドリのさえずりと同様に、ツチボタルの「静けさ」に心が動かされたとうたっている。また、ツチボタルのことを「声なき虫」とも呼んでいることから、ワーズワスはその光というよりはむしろ（無論その光にひきつけられてはじめてその存在に気付くのだが）、それが声を発さないこと、その静けさをたたえていることは明らかである。

このような、鳥の声と対比させることによってツチボタルの静けさを際立たせる描写は、『御者』の冒頭部分、ヨタカが発する音への言及後に静寂のなか現れるツチボタルにも見てとれるだろう。

6月のこの焼けつくように暑い日よ！
最後の日の光に柔らかな暗闇が忍びよっている；
騒々しいヨタカが、ぐるぐると旋回している、—
あの孤独な鳥だけが
聞こえてくる唯一の音
真昼間のそれよりもずっと深い静寂のなかで！
人を信じやすいツチボタルよ、今宵は
地上で生まれたお前の光にとって都合がよい！
だが、まばらに星が見え
雲間のかすんだ狭いところは、
星が、持ち場で瞬いていないので、

活気のない場になってしまったようだ。
大気は、獅子の巣穴のなかのように、
よどんでいて暑い；—また時折
くたびれた、うだるような微風が
まとわりついては息切れをさせる、
病気のときの息苦しさのように；
山々は驚くべき高さまでそびえ、
天には重みがある；
だが、夜露が暑さを和らげ、
静寂が心地よくしてくれる。
しっ、静かに！誰かが音を立ててやってくる！
あれは、御者のベンジャミンだ；（1-23）

ツチボタルの登場前後に「静寂」（6、21）という語が配置されていて、その静けさを最初にやぶって登場するのが主人公の御者であるという事実から、ツチボタルがそうした印象的な場面の照明としてだけではなく、その静けさを体現する存在として描かれていることがうかがえる。また、1836～40年の草稿ではツチボタルが「物静かな仲間」（*Benjamin the Waggoner* 45）と呼ばれていることも、ワーズワスがツチボタルと静けさを結びつけていた確かな証拠として付け加えておきたい。

晩年の作品、「別れの詩」（1842）にも修辭的にではあるが、ツチボタルが言及されている。ワーズワスやコールリッジと親交のあった作家チャールズ・ラム（1775-1834）が姉メアリーとロンドンを離れ、1827年9月にエンフィールドで静かに暮らすことになり、翌年8月に彼らを訪ねたワーズワスは直後にこの詩を書いたとされている。「別れの詩」はその後1841～42年に改稿されており、ツチボタルが登場するのはこの最終版のみである。

また、夜が心地よい薄暗がりとともに訪れるころに、私は見たことがある、
二匹のツチボタルがあまりにぴったりとくっついているので、
柔らかな自己満足を与える光を分かち合っているように見えるのを、
お互いに、露に濡れた地面で、
彼らをおつくりになったお方が静かな安らぎを祝福してくださるその場所で。（17-21）⁽¹¹⁾

ここでツチボタルは、「静かな生」（24）を営む生き物たちの一例として言及されているのだが、初期の草稿では、雨に濡れた羽を日向でゆったりと乾かしている「二羽のサギ」が例示されているだけである。つまり、この最終版でワーズワスはわざわざツチボタルを付け加えたということになる。『序曲』や『御者』のそれとは異なり、鳥が発する音とツチボタルの静けさが対照的に描かれているわけではないのだが、たたえられるべき静謐な存在として詩人がサギだけでは物足りなさを感じていたであろうことは明らかであり、晩年においてもツチボタルが静けさを体現する生き物として詩人の心によみがえってきたことがうかがいしれる。ただし、そもそもツチボタルの発光はメスによる求愛行動であったことを思い起こすと、上の引用箇所のように

に、本来はメス同士であるものをつがいとして登場させているところや、オスをひきつけるための光を「自己満足を与える光」とする表現には違和感が残る。この詩のツチボタルは、あくまでも都会の喧騒から離れてひっそりと暮らすラム姉弟の象徴として捉えられるべきなのかもしれない。

ツチボタルと静けさを関連させた表現例を、もう一つだけ付け加えておきたい。自然との密接な関わりあいがある近年主に環境批評の観点から再評価されている詩人ジョン・クレア（1793-1864）にも、「ツチボタルに」（“To the Glow-worm,” 1814）という作品がある。そこにツチボタルを「静かな時刻の仲間」（13）と呼びかける表現があるが、その静けさはツチボタルのものというよりは夜のそれを指しているというべきだろう。クレアにとってツチボタルは、日中の仕事の疲れを忘れさせてくれる存在ではあるが、それ以上の重要性は持っていないようである。

ワーズワス作品における「静けさ」（stillness, silence, quietness, tranquility...）とは、よく知られているように、沈思や自然との交感の描写でたびたび使用されるキーワードであり、またそれらの行為は創作意欲を回復したり、促進したりすることにもつながった。したがって、「声なき虫」ツチボタルを描くという行為には、単にお気に入りの虫との遭遇を記録する側面だけではなく、自然との絆や詩人としての使命を再確認するという重要な側面も含まれていると考えられる。ワーズワスが他の詩人たちとは異なり、ツチボタルの光を宗教詩のなかでも、手の届かない神聖な存在というよりはむしろ、自らとしっかりつながった自然界の一存在として描いており、恋愛詩のなかでも求愛の光にこだわる慣習的レトリックに依拠せずに、自身が目にした一存在として描いていたことと考え合わせると、そこからは詩人がツチボタルをいくつかの実体験に基づいて、詩人としてその存在に迫り、それをありのままに描出しようとしていた姿勢が浮かび上がってくるのである。

IV. ツチボタルとワーズワスの環境詩学

以上見てきたようなワーズワス特有のツチボタルの捉え方や描き方は、環境批評の観点から読み直した場合、特別な意味を持つことになる。イギリスにおける環境批評家ジョナサン・ベイトの『ロマン派のエコロジー』（*Romantic Ecology*, 1991）以降、イギリス・ロマン派研究に本批評が導入されてから久しく、作家の自然環境への態度や、作品を取り巻く自然環境およびその表象について多くの研究が行われてきた。本論の冒頭でも述べたように、そうした場所に住まう生き物たちの研究に焦点を当ててみると、動植物と比べて虫を扱ったものは十分に行われていないこともあり、それが本研究の動機のひとつでもあった。本論では主にツチボタルを取りあげて、ワーズワスを中心に、またその周辺の作家たちにもふれながら、ツチボタルの捉え方と描き方について論じてきたが、ロマン主義の時代以前から慣習化されていたツチボタルのレトリックにとらわれず、独自の視点でその存在を捉え、描こうとする姿勢が、ワーズワスの作品には読み取られることを明らかにしてきた。

ベイトは『ロマン派のエコロジー』に続く『大地の歌』（*The Song of the Earth*, 2000）で、「環境詩学」という研究アプローチを提唱している。これは、ロマン主義に造詣が深く、またその哲学が環境哲学であるとして近年再評価を受けているマルティン・ハイデガー（1889-1976）の後期存在論哲学に基づき、作品を書く、読むといった文学的行為がいかにエコロジカルであ

りうるかを探求するものだ。ペイトはワーズワスの環境詩学の一例として、「自然との『沈黙の対話』」（『大地の歌』75）を挙げ、詩人の自然との交感体験の描写では、自然が静寂を表す言葉で形容されたり、沈黙した存在として描かれたりしていることを指摘している。上で論じてきたようなワーズワスによるツチボタルの描写もまた、この環境詩学の一形態として読むことができるのではないか。ワーズワスのツチボタルは、慣習的レトリックの使用や象徴化といった、言語による意識的な内面化をできるかぎり避けるかたちで、その存在が限りなくありのままに表されており、またそうした存在として読むことができる。

ロマン派のテキストにおけるツチボタルを何らかのロマンティック・イメージとして読む行為は、たしかにテキストの意味を豊かにしてくれるが、詩を読者が体験しうる出来事として捉えたとき、読者である私たちを取り巻いている環境危機というコンテキストをふまえた読みが展開されてもよいのではないか。ワーズワスがツチボタルを含めたいくつかの生き物たちを、わざわざ声を持たない沈黙した存在として描いたように、自然を象徴化を拒む他者として位置付けたり、あるいは自然のマテリアリティを浮き彫りにしたりするような描写には、人間中心主義的発想を介さずに、自然をありのままに描こうとする姿勢が表れている。そうした読みを実践することはまた、テキストに描かれた存在がそれまでの読みの行為において失われていた姿を回復することにもつながるのではないだろうか。

【注】

- (1) アシュリー・クロスは、コールリッジ、ウィリアム・ブレイク、ロバート・サウジー、メアリー・ロビンソンらのハエを主題とした作品を取りあげ、ハエと作品が発表されたメディアのはかなさに着目し、彼らがいかにそれらを介して作家としての意義を主張していたかを明らかにしている。またジャネール・A・シュワルツは、虫の研究が飛躍的な進歩を遂げた18世紀ヨーロッパの博物学を、ブレイク、メアリー・シェリー、ジョン・キーツらがどのように受容し、詩的イメージを生み出していったのかを、蠕虫に焦点を当てて論じている。
- (2) チョウについてはスティーブン・ギルによる「チョウに」の注を、ツチボタルについてはルーシー・ニューリンの論を参照。
- (3) 「チョウに」は以下の版による。William Wordsworth, *The Major Works*, ed. Stephen Gill (Oxford: Oxford UP, 1984). 以下、詩の引用に際しては、行数のみを括弧に入れて本文中に示す。引用した作品に邦訳がある場合は参考にしたが、必要に応じて変更を加えている。
- (4) Duncan Wu, *Wordsworth's Reading 1770-1799* (Cambridge: Cambridge UP, 1993) 147.
- (5) Wu, *Wordsworth's Reading 1800-1815* (Cambridge: Cambridge UP, 1995) 85.
- (6) Wu, *Wordsworth's Reading 1770-1799* 44-45.
- (7) 「巡礼者の夢」は以下の版による。Wordsworth, *Shorter Poems, 1807-1820*, ed. Carl H. Ketcham (Ithaca: Cornell UP, 1989).
- (8) 「岩に生えたサクラソウ」は以下の版による。Wordsworth, *Last Poems, 1821-1850*, ed. Jared Curtis (Ithaca: Cornell UP, 1999).
- (9) 「あらゆる美しいもののなかに」は以下の版による。Wordsworth, *Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807*, ed. Jared Curtis (Ithaca: Cornell UP, 1983).
- (10) ワーズワスはこの作品が収められたクーバーの詩集を読んでいる。Wu, *Wordsworth's Reading 1770-1799* 38-39.
- (11) 「別れの詩」は以下の版による。Wordsworth, *Last Poems, 1821-1850*.

【引用文献】

- Bate, Jonathan. *Romantic Ecology: Wordsworth and the Environmental Tradition*. New York: Routledge, 1991. (小田友弥・石幡直樹訳『ロマン派のエコロジー——ワーズワスと環境保護の伝統』松柏社、2000年。)
- . *The Song of the Earth*. Cambridge: Harvard UP, 2000.
- Clare, John. *The Early Poems of John Clare, 1804-1822*. Ed. Eric Robinson and David Powell. Vol. 1. Oxford: Clarendon, 1989.
- Clark, John F. McDiarmid. *Bugs and the Victorians*. New Haven: Yale UP, 2009. (奥本大三郎・藤原多伽夫訳『ヴィクトリア朝の昆虫学——古典博物学から近代科学への転回』東洋書林、2011年。)
- Coleridge, Samuel Taylor. *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Poetical Works I*. Ed. J. C. C. Mays. Princeton: Princeton UP, 2001. (上島建吉訳『対訳コウルリッジ詩集』岩波書店、2002年。)
- Cowper, William. *Poems*. London: J. Johnson, 1782.
- Cross, Ashley. "To 'buzz lamenting doings in the air': Romantic Flies, Insect Poets, and Authorial Sensibility." *European Romantic Review* 25.3 (2014) : 337-46.
- Darwin, Erasmus. *The Botanic Garden*. London: J. Johnson, 1791.
- Gleig, George, and Collin Macfarquhar. *Encyclopaedia Britannica; or, A Dictionary of Arts, Sciences, and Miscellaneous Literature*. 3rd ed. Edinburgh: A. Bell and C. Macfarquhar, 1797.
- Newlyn, Lucy. "Wordsworth Among the Glow-Worms." *Essays in Criticism* 61.3 (2011) : 249-74.
- Schwartz, Janelle A. *Worm Work: Recasting Romanticism*. Minneapolis: U of Minnesota P, 2012.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Major Works*. Ed. Zachary Leader and Michael O'Neill. Oxford: Oxford UP, 2003. (アルヴィ宮本なほ子訳『対訳シェリー詩集』岩波書店、2013年。)
- White, Gilbert. *The Natural History and Antiquities of Selborne, in the County of Southampton*. London: T. Bensley, 1789. (新妻昭夫訳『セルボーンの博物誌』小学館、1997年。)
- Wordsworth, William. *Benjamin the Waggoner*. Ed. Paul F. Betz. Ithaca: Cornell UP, 1981.
- . *The Fenwick Notes of William Wordsworth*. Ed. Jared Curtis. London: Bristol Classical, 1993.
- . *Last Poems, 1821-1850*. Ed. Jared Curtis. Ithaca: Cornell UP, 1999.
- . *Lyrical Ballads, and Other Poems, 1797-1800*. Ed. James Butler and Karen Green. Ithaca: Cornell UP, 1992.
- . *The Major Works*. Ed. Stephen Gill. Oxford: Oxford UP, 1984. (田部重吉訳『ワーズワース詩集』岩波書店、1938年。)
- . *Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807*. Ed. Jared Curtis. Ithaca: Cornell UP, 1983.
- . *The Prelude: 1799, 1805, 1850*. Ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill. New York: Norton, 1979. (岡三郎訳『ワーズワス・序曲——詩人の魂の成長』国文社、1968年。)
- . *Shorter Poems, 1807-1820*. Ed. Carl H. Ketcham. Ithaca: Cornell UP, 1989.
- Wu, Duncan. *Wordsworth's Reading 1770-1799*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- . *Wordsworth's Reading 1800-1815*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.